新型インフルエンザ対策について

所　属：国立保健医療科学院　企画調整主幹

　　　　厚生労働省新型インフルエンザ対策推進本部　事務局次長

発表者：鈴木康裕

　A型H1N1インフルエンザ（以下「新型インフルエンザ」という）については，人口の多くが免疫を持っていないために感染者数は多くなると考えられているが，罹患してもタミフル等による治療が有効であるし，健常成人が重症化するリスクは１００万人中１人よりも低い。ただし，子供や喘息等の基礎疾患を有する方が罹患すると入院や重症化のリスクが高くなるため， 一定の注意が必要である（季節性のインフルエンザでは高齢者が重症化する例が多い）。

　現在の国内の流行状況としては，１０月冒頭から見られた急速な感染の拡大は収束しつつあるようだが，通常のインフルエンザの流行時期を控え，今年の冬にどのようなインフルエンザがどの程度流行するのか，注意深く観察していく必要がある。

　新型インフルエンザに対するワクチンは，感染予防効果は保証されていないが，重症化や死亡は防ぐことができると考えられている。感染による重症化のリスクが高い層への接種が優先して行われている現状だが，季節性インフルエンザの製造ラインを活用して，その製造を極力妨げないようにして順次製造した上で出荷しているために，ナマモノであるワクチン製造につきものの先行きの不透明さとあいまって，現場における供給のニーズには必ずしも答えきれていないのでは，との指摘もある。

　今回の新型インフルエンザの流行は，H５N1インフルエンザに対する準備を整えている中で発生している。そのため，H5N1の流行に対する準備となり得るという利点はあるものの，対策全体としてH1N1の毒性に比して過重であったのではないかとの論点もあり得る。また，本年３月にメキシコで発見された流行について，ウイルス株の同定とワクチンの製造と流通を，短時間かつ不完全な情報しかない不確実な状況において行わなければならなかったという点もある。

　こうした限局的な状況下で，国民や関係者の理解と協力を得て対策を推進し，社会全体にとっての最適解をいかに遅滞なく実施していくかが問われると考えられる。